

イデオロギーとしての、あるいは 言説としての〈教育〉をめぐって

—— 19世紀イギリス教育史研究 ——

上野 耕三郎

I-1 〈教育〉ということばをめぐる争い

教育に関して言及された19世紀の前半の著作、報告書をひもといた者ならばわかるであろうが、それらを少し読み慣れると意外な消化不良感におそわれる。というのは、なかなか知りたいと思う「事実」に突き当たらないからである。たとえば、いったい労働者大衆の子どもたちはどこで、どのような教育を受けていたのか、彼らの教育実態はどのようなものであったのか、という素朴な問いかけに対して、これらの資料はストレートには答えてくれない。これに対して「無いものねだり」という失笑が聴こえてきそうである。あるいは、とくに近年、労働者階級の自叙伝の分析、聞き書きによる教育史が、従来の教育史の枠組みに果敢な挑戦を試みているのを知らないはずはなかろう、との声が出るのも充分承知している⁽¹⁾。だがこの消化不良感はなかなかいやされない。

なぜこのような消化不良感におそわれるかは、あえて言うまでもないこと

(1) David Vincent, *Bread, Knowledge and Freedom: A Study of Nineteenth-Century Working Class Autobiography*, Europa Publications Limited, 1981. (川北稔、松浦京子訳『パンと知識と解放と——19世紀イギリス労働者階級の自叙伝を読む』岩波書店、1991)、Stephen Humphries, *Hooligans or Rebels?: An Oral History of Working-Class Childhood and Youth 1889-1939*, Basil Blackwell, 1981. (山田潤、P. ビリングズリー、呉宏明監訳、『大英帝国の子どもたち——聞き取りによる非行と抵抗の社会史』柘植書房、1990)

かもしれない。それらの著作や報告書がある一定の立場、視角から「事実」「現象」を叙述しているからである。だから現代の読み手がそれらを読むと、前面に躍りでた書き手の規範的ことば——「この教育現象は望ましくない」「教育はこうあるべきだ」——に阻まれて、なかなか知りたいと思っていることに到達できない苛立ちを感じる。これが批判的読みというものが要請される由縁であることは常識であろう。

ところでこの批判的読みということに関連づけて、ジョンソンは公的報告書は大きく分けると三つの用い方があり、そのひとつはそこから教育観を析出できることである、と指摘している。というのも「教育は(救貧のような)一連の公的問題に属しており、そこではイデオロギーがもっとも侵入しており、科学に対する熱望がもっともらしく見える」領域だからである。また「報告書は子ども、貧困あるいは階級に対する態度を研究するためにも用いることができる。学校教育は多くの顕著なディレンマに関係し、原則、偏見に関して豊富であるので、イデオロギーの研究のために優れた媒介項を提供する」と述べている⁽²⁾。実際に、他の領域に較べてみても、とくに教育領域ではイデオロギーの浸透が顕著である。

イデオロギーということばは頻繁に用いられるが、それではイデオロギーとはいったい何か、もう少し限定して教育に関するイデオロギーとは何か、いったいそれはどのように形づくられ、作用するのかということになる。ドナルドが言うように、さまざまな教育に関する主張は分業や労働過程の変化、家族法や福祉制度などのさまざまな変化と一緒に考えると、社会規制の新しい戦略のひとつとして読むことができる。そもそもその主張は「現行の制度を叙述しているというよりも、なぜ学校教育が提供されるべきであり、いかにしてそれらは組織されるべきかについての命令的主張である。」すなわち

(2) Richard Johnson, 'Elementary Education: The Education of the Poorer Classes', in Gillian Sutherland *et al.*, *Education in Britain*, Irish Academic Press, 1977, pp.24, 26.

「教育イデオロギーは一連の相反する信念、知覚、主張、価値、嘆き、そして希望が『教育』ということばの回りに表現されたもの」(強調は原文イタリック、以下同様)である⁽³⁾。だから、ある主張の受け手あるいは読み手は、「教育」の現実を認識しことを必ずしも意味していない。ある主張を受容することは、そのことばの背後にある現実を認識したというのではなく、そのことばが依拠している暗黙の前提を確証する作業を行なうことでもあった。「教育」ということばは現実自体の教育構造によって直接規定される、あるいはそれを直接反映したものではない、ということである。ところが、イデオロギーとしてそれが高度になればなるほど、表象された現実のひとつの、所与の、統一的、不変なものであり、超階級的意味をもつものとして固定化される傾きを持つ。そもそも意味は辞書的なことばそのものから生じるのではない。「教育」ということばによってどのような支配的な意味を人々の頭の中に喚起するかは、さまざまな社会的実践を媒介としてなされる意味表出の活動に条件づけられている。言い換えれば、最終的に「教育」ということばにどのような意味が押しつけられたかは、相争う諸階級、諸権力の関係を介して実現されるということである。これはまさに「意味表出の政治」である。

ところで、イデオロギーがいかにかに形づくられているかについて、新たな視角から理解の深まりを与えてくれるひとつの契機を提供したのは、言説(discours, discourse)についての、あるいはその作用についての M. フーコーの洞察である。よく知られているように、フーコーはイデオロギー概念自体を拒否している。言説形成(あるいは言説の規則性を通して作用するイデオロギー形成)はそれ自体の知識の対象を形成し、それ自体の主体(sujets, subjects)をも形成する。だからイデオロギーという概念は不用とされる。主体というものが抛擲され、言説によって主体は形づくられるとするアンチ・

(3) James Donald, 'Beacons of the future: schooling, subjection and subjectification', in Veronica Beechy and James Donald (eds.), *Subjectivity and Social Relations*, Open University Press, 1985, pp.215, 216.

ヒューマニズムは、フーコーに共感を寄せるマルクス主義者との決定的差異であり、この点はもう一度検討しなければならない点であろう。ともあれ、還元論あるいは規定論に類したルート・セオリーを拒否しているフーコーは、社会経済的基盤あるいは階級というような真理の認識論的基礎の起源をたどる代わりに、「だいじなことは、ひとつの言説のなかで、科学性とか真理の領域の属するものと、それ以外の領域に属するものとの間に分割線を設けることではなくて、それ自体は真でも偽でもない言説の内部に、どのようにして真理としての効果が生じてくるのか、を歴史的にみきわめること⁽⁴⁾」の方が有益と考えている。すなわち、真理が言説の内部でいかに生み出され、社会的実践のなかでどのような意味をもち、展開されたのか。そしてその確立された「真理の体制」はいかにして社会・文化的影響をもったのか。その「真理の体制」内部でいかにして正しいものを認め、間違ったものを排除する方法を打ち立てたのか。そのような課題に答えることこそがフーコーのめざしたものであった。

『フーコーと教育』の編者ボールはフーコーの「言説」について次のように記している。

「フーコーの分析的枠組みの中で言説が中心的概念となる。言説は言ったり、考えられたりすることについてばかりでなく、誰が、いつ、どのような権威をもって言うことができるのかということについてのものでもある。言説は意味と社会関係を具現化し、主体と権力関係の両者を形づくっている。『言説は彼らが話している対象をシステムティックに形成する実践である。……言説は対象について語っているのではない。すなわち、言説は対象を認知するのではなく、それらを形づくるのであり、そうすることのなかで、言説がそれらを作りだしたということを隠して

(4) 北山晴一訳「真理と権力」、桑田禮彰他編『ミシェル・フーコー 1926-1984』所収、新評論、1984、84頁。

しまう。』（『知の考古学』）かくして意味そして定義の可能性はそれを用いる人々によってとられる社会的そして制度的視座をとおして先取りされ、封じられてしまう。したがって意味は言語から生じるのではなく、制度的実践から、権力関係から生じる。単語や概念は異なった言説の内部で展開される時には、その意味と趣旨を変えてしまう。言説は考えの可能性を抑圧する。言説は単語をある特殊な方法で指示し、つなげ、その他のつながりを排除し、置き換えてしまう。しかし、言説が吸収と同様に排除によって、言うことのできることと同様に言うことのできないことによって構成されるかぎりには、言説は他の言説、意味の他の可能性、他の主張、権利そして視座と敵対的關係に立つ。これこそがフーコーの『断絶の原理』すなわち『それによって言説が権力の道具そして効果となるばかりでなく、障害、抵抗点そして敵対する戦略の出発点となるような複雑なそして不安定な権力を酌量しなければならない』（「主体と権力」ということである⁽⁵⁾）

もう一度簡単にまとめておけば、「19世紀の教育イデオロギーは現実の反映ではなかった。一連の相反する展望、価値そして戦略を通して、現実を屈折させたものである。……もう一步進めれば、教育の目的、実践、性格を規定することによって現実にある特殊な意味づけを押しつける試みを構成している。かくして、『教育』ということばそのものは争い、闘争の場となった。⁽⁶⁾」あるいは、1830、40年代の報告書、具体的には統計協会の教育調査報告書、1835年のケリー卿の教育報告書、勅任視学官報告書、工場査察官報告書などは、「法律や行政がより明確にしなければならない教育問題に少しも負っていない。それらは複雑な教育の政治的駆け引きそして社会闘争から生み出され

(5) Stephen J. Ball, 'Introducing Monsieur Foucault', in S. J. Ball (ed.), *Foucault and Education: Disciplines and Knowledge*, Routledge, 1990, pp.2-3.

(6) James Donald, *op cit.*, p.216.

る熱望に多くを負っている⁽⁷⁾」との指摘、これこそが「意味表出の政治」的争いであり、「教育」ということばをめぐって、そのことばで何を含意させるか、どのような意味を押しつけ、どのような意味を排除させるかの「真理の体制」を築く争いであったのである。とりわけ19世紀前半には、労働者大衆を隅から隅まで監視する体制が張りめぐらされ、ありとあらゆる情報がかき集められるようになった。だが、それらをもとに労働者大衆の教育について教育政策担当者、社会調査家が口に出し、書き、論じたことは所与の社会現実そのものの反映ではなかった。それらは知識のきわめて特殊な体制そして権力関係の能動的な所産であった。

I-2 道徳環境主義

1848年以降勅任視学官を務めたサイモンズ (Jelinger C. Symons, 1809-1860) はその著作『危険な諸階級の状態およびその処遇に関する当面の戦術⁽⁸⁾』のなかで、特にその第二章で、内務省 (Home Office) の統計をもとにして、1835年から1847年までの12年間にわたる犯罪の分布に関する詳細な統計分析を行なっている。それは犯罪をひきおこす要因がいったい何であるのか、そして犯罪を防ぐ方策は何かという答えを探り出す試みであった。サイモンズは、地域性、職業、性別そして年齢がいかに犯罪に影響を与えているか、あるいは犯罪と不況との関連はいかなるものなのか、飲酒による犯罪はどの程度なのかなどについての情報をわれわれ読者に提供してくれている。もちろん提供されたこれらの情報分析——たとえばどの地域で犯罪数が増大あるいは減少しているか、そしてその要因は何か——が、どの程度の信憑性を持ち得ていたかは避けて通れぬ問題である。しかし、あえてここではその問題の検証はひとまず脇へ置いておくことにする。なぜならば、私の当

(7) Richard Johnson, *op cit.*, pp.7-8.

(8) Jelinger C. Symons, *Tactics for the Times, as regards the Condition and Treatment of the Dangerous Classes*, 1849.

面の関心は当代のイデオログが〈教育〉ということばの内に何を内包させようとしたかにあり、それがわかれば充分だからである。

さて当然のことながら、当代のイデオログの多くは、犯罪を産業革命を契機とした社会構造の転換による構造的矛盾の顕在化として位置づけてはいなかった。サイモンズも違わずこんなふうに説明している。

「工業はイングランドにとってきわめて重大なものであるが、事実は明らかに次のようなものである。イングランドでの犯罪の急増は主として人口集中した地域の害悪、そしてそれに伴うごみごみとした住宅とふしだらな仲間という害悪に、またそれに対して十分な道徳的反撃をくわえられないことによるものにちがいない。というのもそのような地域に犯罪は集中し、蔓延していることからそうである。」

「不況が犯罪の増大と合致しているがゆえに、貧困は犯罪の有機的あるいは不変な要因と考えることほど誤ったものはない⁽⁹⁾。」

この引用からだけでも、犯罪は貧困という構造的要因と関連させられず、もっぱら都市化に伴う社会諸現象と結びつけられていることがわかるであろう。ところで、犯罪を多くの人々が時の社会問題として論じた理由の一つは、犯罪による損失と犯罪者の処罰にかかる費用という財政的観点からである。

「犯罪を罰する（言い換えれば、育てる）のに毎年支払っている 200 万ポンドのなかに、窃盗によって失われる 200 万あるいは 300 万ポンドのなかに、あるいは救貧のために支払われる 700 万ポンドのなかに、なされるべき節約はないのだろうか。私たちの間で育てており、多くの大衆の生き血を穢す盗人やごろつきの一群の悪い実例によって染まったり、

(9) *Ibid.*, pp.50, 55.

翼にかけられ破滅したりした召使や労働者の頽廃そして墮落によって生じた、労働の損失からの数百万ポンドをさらにこれに加えてもよい。金銭という観点からだけでも危険な階級を訓練し、彼ら自身にとっても他の者にとっても安全にすることは、王国の産業と財産の利害となる⁽¹⁰⁾。」
(傍円強調は引用者、以下同様)

犯罪は財政的観点から時代の焦眉の解決課題とされ、犯罪が構造的なものに起因するのではないとすれば、教育がこのような社会問題——犯罪、救貧など——と、どのように結びつき、結びつけられていたか、という問題が浮かび上がってくる。民衆教育を犯罪と関わらせて論じる風潮は特殊なものではなく、かなりな程度まで時代の一つの潮流となっていた。たとえば、幼児学校の提唱者であるウィルダースピン (Samuel Wilderspin, 1791-1866) はその著作『1歳から7歳までのすべての子どもの知的小および道徳的力を発達させるための幼児システム⁽¹¹⁾』を、「年少非行」の章から書き始め、犯罪予防のために幼児学校設立の必要性を説いている⁽¹²⁾。

(10) *Ibid.*, pp.145-146.

(11) Samuel Wilderspin, *The Infant System, for developing the intellectual and moral powers of all children, from one to seven years of age*, sixth edition, revised throughout, 1834.

(12) ウィルダースピンは教育特別委員会で幼児学校についての見解を求められた際に次のような証言をしている。

「質問 174. その(幼児学校) システムの普及の最終的成果はどのようなものと期待していますか? ——年少非行は減少し、監獄の必要性が減じると思います。というのも、一般に良きものと考えられるもので心を満たせば、予防は治療よりも望ましいし、幼い年齢の人間から始めることによって刑罰の費用をたいへん減じることができると結論づけられるかなりな希望があるからです。」

「回答 339. 幼児学校 4 校で、一年に 800 人の幼児が教えられている。最初の逮捕、公判、移送の費用を考えると、各々の個人を変えるのに国が負担する費用で幼児学校は維持できる。」

「質問 343. そうすると警察官よりも幼児学校を持つ方が経済的ということになるのでしょうか? ——そう思います。」(*Report from the Select Committee on Education in England and Wales; together with the Minutes of Evidence, appendix, and index*, 1835, 以下 *Report 1835* と略)

さらに、ウィルダースピンの考えをグラスゴーのモデル・スクールで発展させたストウ (David Stow, 1793-1864) は、1836年に『教育のトレーニング・システム⁽¹³⁾』を著し、そのなかで、教育と犯罪との関係に言及し、民衆学校とりわけ彼の提唱する教育学校 (training school) の必要性の根拠の一つとして犯罪予防をあげている。そのモットーは「治療よりも予防の方が望ましい」 (Prevention is better than cure) ということであった。

「すべてのキリスト教宗派の人々は予防よりも治療の方に注意を奪われている。誰も予防の原則に信頼を置いていない。非行少年のための機関あるいは売春婦更生所の設立のためには諸手をあげ賛成し、お金を出すが、……しかし犯罪の予防のための直接の手段、あるいは道徳的学校教育 (Moral school training) を用いることに関しては、人々は懐疑的である。しかし予防のために一千ポンドが使われれば、少なくとも罰するためあるいは治療のために使われる一万ポンドを節約するであろう。」

「泥棒、スリ、その他の社会のペストともいべき者の次世代の人数が減らされるべきならば、道徳教育学校 (training school) をもつべきである。それらは最も安上がりな警察であることがわかるであろう。」

「得られる利益を最低限に見積もっても、犯罪の減少、そして社会の一層の平和と安全によって2千万ポンドが浮くであろう⁽¹⁴⁾。」

だから犯罪を予防するための教育論ともいべきこれらの主張を、さらに

(13) David Stow, *The Training System of Education, including moral school training for large towns, and normal seminary, for training teachers to conduct the system*, 1836. 「その著作は19世紀に発行された教育実践についての本のなかで最も影響力のある本の一冊となった」 (Malcolm Seaborne, *The English School, its architecture and organization 1370-1870*, Routledge and Kegan Paul, 1971, p.144.) と評価されている。

(14) David Stow, *op. cit.*, pp.73, 82, 85.

一步押し進めれば、必然的に一部の開明的ブルジョア・イデオログが展開している国民教育論、義務教育論に対してひとつの論拠を提供することになる。

「害悪を比較することによって、現在焦眉の問題となっていることは解決されるであろう。というのも犯罪者を自由に育てることによる大衆への害は、無償学校へ子どもをおくことを個人に強制することよりも100倍も大きい。ロンドン警察が現在の賞賛すべき状態におかれていた時には、軍事的専制、主体の自由等々について話したり書いたりするのはたいへんナンセンスであった。……ロンドンや他の大きな都市の街頭に出没している子どもたちを、強制して学校へ送ることに私はまったく躊躇しない⁽¹⁵⁾。」

民衆教育は犯罪の予防あるいは犯罪率を押し下げる手段として位置づけられ、華々しく喧伝もされたのである。ところで、なぜゆえそうなのか、民衆教育の言説がなぜゆえ常識化され、イデオログたちを衝き動かしたのか、という疑問が当然のことながら湧き上がってくる。民衆教育の言説は、犯罪の予防のための政策立案の場をかたちづくられたものであることを示唆するにここではとどめておく。ともあれ19世紀前半の教育政策の立役者であるケイ (James Phillips Kay, のちのSir James Phillips Kay-Shuttleworth, 1804-1877) も「犯罪件数は共同体の道徳状態を確かめる一つの主要な手段である⁽¹⁶⁾」とのゆるぎない確信を披瀝しているように、犯罪件数・犯罪率は労働者大衆の道徳状態の指標としてとりあげられていた。犯罪を第一義的に<道徳>状態に関わらせて考えてゆくことは、この時代の思想潮流のなかで

(15) James Simpson, *The Philosophy of Education, with its practical application to a system and plan of popular education as a national object*, second ed., 1836, p.171.

(16) James Phillips Kay, *The Moral and Physical Condition of the Working Classes*, second ed., 1832 (rep. 1969), p.60.

は、犯罪を民衆教育状態の基本的指標としてとりあげていたことと同義である。1835年の教育に関する特別委員会の報告書もまた、犯罪者数の急激な増加による国家財政の支出増大は、宗教的そして道徳的教育が不足あるいは欠如していることに起因している、とのステレオタイプ化した結論を導きだしている⁽¹⁷⁾。

もちろん、民衆教育の言説は、犯罪の予防という政策立案の場でのみかたちづけられたわけではない。救貧費用の増大そしてその非効率的管理に対する関心のなかからも民衆教育の言説は現れてきている。言うまでもなく、それは救貧対象となる貧困状態 (pauperism) に対する防壁としての教育という意味である。

「教育は将来の世代から貧困 (pauperism) の芽をとり除き、そして大衆の精神と道徳のなかに社会の諸機関のためになる最良の保障を獲得するための、最も重要な手段の一つとして見なされるべきである⁽¹⁸⁾。」

「躊躇なく次のように言える。貧困 (pauperism) や犯罪を予防するための、そして貧民階層の状態を向上させるための道徳的手段は、犯罪あるいは貧困の直接的抑圧や防止のために採用されている物理的手段のどれよりも長い期間にわたって効力あるもののように見える⁽¹⁹⁾。」

「悪徳と肉体的頹廢の源は貧困 (pauperism) の原因と同類である。貧民の間で最も貧困 (destitute) な者は、しばしば最も道徳的に低い者 (demoralized) である——徳が最も確実な節約策である——悪徳は浪費と欠乏によって絶えずつきまとわれる。最も被救貧民 (pauper) が多い場所に、ジン・ショップ、タバーン、ビア・ハウスが最も多い⁽²⁰⁾。」

(17) *Report1835*, 報告 p.v.

(18) James Phillips Kay, *The Training of Pauper Children*, 1839 (rep. 1970), p. 4.

(19) *Report1835*, 報告 質問 279 に対するケイの証言

(20) James Phillips Kay, *The Moral and Physical Condition.....*, p.57.

もしケイが時代の典型だと考えられないならば、チャッドウィック (Sir Edwin Chadwick, 1800-1890) とシーニユア (Nassau William Senior, 1790-1864) によって書かれた1834年の救貧法報告書の最終章をあげてもよい。

「正しい原則と習慣を一般に広めるためには、なんらかの経済的取り決めや規制を求めるよりも、道徳的そして宗教的教育の影響を求めるべきである。…… (私たちが提案するのは) 教育の進歩を現在阻害し、その成果を妨害する障害物を取り除き、貧民階層の知的そして道徳的状态を高めるために用いることのできるあらゆる手段を自由に操作できるようにすることである。教育のために現在割り当てられている基金、その多くは社会の現在の要求にはそぐわない方法で使用されているが、賢明にそして経済的に用いられれば、国家によって提供することのできる援助をすべての人々に与えるのにそれは充分である、と私たちは信じている⁽²¹⁾。」

ここには19世紀前半の公式的見解とでもいうべきものが集約されている。政治的あるいは社会的問題は道徳あるいは理想的なことばで語られ、「進歩」に対する揺るぎのない信奉が示されている。救貧の問題は労働者大衆の道徳問題という枠組みで考えられ、民衆教育の言説は救貧の問題を労働者大衆の生活習慣、文化の問題へと焦点をずらす過程で現れてきたものである。道徳問題は当然のことながら教育を含意しており、社会・経済諸問題は教育問題として語られることとなる。こうして教育に対する財政的援助は、他の支出——救貧費、犯罪者処罰のための費用など——を抑えることになる、という言説が人々の頭にのぼってくる。

(21) *Poor Law Report 1834*, pp.496-497.

既におわかりのように、以上のような言説の裏に見え隠れしているものはヴィクトリアン・モラリズムとでもいうべきものである。モラリズムということばからも推察されるように、犯罪は〈教育〉言説のなかで〈道德〉問題として位置づけられ、かたちづくられていったのである。「不幸なことに犯罪は私たちの住民の大問題のうちで重要な特徴となっている。犯罪は道德的病弊の派生物であり、その道德的病弊はけっして正確に測ることはできないが、その重大さだけは立証できる⁽²²⁾。」同じことだがこうも述べられている。「犯罪は道德的病気であり、道德的治療を必要とする。……この義務を遂行するのに失敗することは社会に対する大きな犯罪である⁽²³⁾。」

モラリストとしての教育家は、彼らが多かれ少なかれその根本では信奉あるいは是認している社会・経済制度自体に、社会問題の原因を探し求めることはせずに、大衆の上へと罪を転嫁した。たとえば、既に示唆しておいたように、犯罪は貧困のような社会構造的な矛盾から生じるという考えは否定され、あくまでも〈道德〉的窮乏にこそその究極的原因が探し求められる。「最も大胆な若年常習犯の犯罪の要因は物質的窮乏ではなく、教育の欠如でもない。その要因は初期の訓育 (training) の欠如そして親の怠慢から生じた道德的窮乏である⁽²⁴⁾」というように。「道德的窮乏」の内実がいったいどのようなものであるかは後につまびらかにしなければならないが、ここでは少なくともイデオログたちの多くは〈道德〉ということばで多くを語ろうとしたことがわかれば充分であろう。

この点で1832年のコレラの蔓延そして貧民大衆の状態に精通していたケイの語ることばは、資本主義の擁護者としての、そして時代の主導的イデオログたる彼の面目躍如たるものである。

(22) Jelinger C. Symons, *op cit.*, p.15.

(23) *Ibid.*, p.96.

(24) Mary Carpenter, *Juvenile Delinquents: Their Condition and Treatment*, 1853 (rep. 1970), p.36.

「ここで完膚なきまでに暴いた害悪は、産業システムの必然的結果ではなく、大いに異なった、偶然的な起源を持っているし、思慮分別のある統御によって完全に取り除くことができる。」

「制限されない商業の自然な傾向が社会のエネルギーを発達させるものであり、生活の快適さや満足を高めるものであり、社会のあらゆる構成員の物質的狀態を改善すると信じているので、この町の産業に関連する下層階級の狀態を忠実にしかし愛情をもって描いてきた。というのも、狀態に影響を与える害悪はそれ固有ではない外部の要因から生じるものと考えているからである。文明の進歩を促し、世界に広めるシステム——それは商業組織の利益に基づき、恒久的国際法を樹立し、国家の平和を維持することを約束する——は、最大多数の民衆の幸せとは矛盾しない。……道徳的そして物質的頹廢は野蛮さ (barbarism) から切っても切れない関係にある。」

「労働者階級に影響を与える害悪は、商業システムの必然的結果ではないが、その活力を脅かすものではないにしても、そのエネルギーを損なう病弊 (disease) である証拠を提供している⁽²⁵⁾」

こうしてケイに典型をみることのできるあまたのモラリストたちにあっては、現在の「病弊」は「遠いあるいは偶発的な起源」によるもので、あくまでも「病弊」の攪乱的影響は一時的なものであり、根本においては現行の社会・経済制度への信仰は揺るぎのないものであった。そして労働者大衆へと「病弊」の原因と罪が転嫁された。もちろん原因と罪が労働者大衆へと転嫁されたといっても、労働者大衆の「生まれながらの」本性あるいは出自によって現在の「病弊」が惹起されたというのではない。そのような宿命論に立つことはブルジョア・イデオログにはできなかつたはずである。もちろん「生

(25) James Phillips Kay, *The Moral and Physical Condition.....*, pp.15, 77-78, 79.

まれながらの」本性という考えを裏口からこっそり導き入れていることがないわけではないが、彼らは基本的には環境論を主張する。労働者大衆を取り囲む環境を望ましい状態に設定することによって、彼らはこの「病弊」から逃れることができると説くのである。しかしその「環境」はけっして第一義的には「物質的」ではなく「道徳」である。ここに〈道徳〉と〈環境〉との合体がみられる。それを道徳環境主義 (moral environmentalism) と呼ぶこともできよう⁽²⁶⁾。しかしだからといって、労働者大衆に対して、自分たち自身の環境を設定し、問題を解決する自律的能力が付与されるわけではない。付与されるべきものは、あくまでも「上から」の〈道徳的〉環境、それらいわば家父長的な傾きをもったものであった。

(26) 「真の衛生改革者は肉体に関してと同様に精神についても顧慮していた。すなわち、このことが意味するところすべては、彼は下水工事人、換気係などであると同様に教育家である。」(G. Bell, 'A Few Observations on the Principles of Social Reform', Viscount Ingestre (ed.), *Meliora or Better Times to Come*, second series, 1853 (rep. 1971), p.66.)

ジェントリーあるいはブルジョアジーの利害を体しているとみられる視学官のひとりには、その報告書に次のように記している。

「ミッドランド地区の大衆は大規模にわたって国の工業と商業の繁栄、そして国の富に寄与している。——その労働によって富を生み出している人々に対しては、その富は道徳的改善あるいは知的進歩あるいは社会的幸せという見返りをもたらしてはいない。

私の義務の性格からいっても、私はこの社会の福祉に関心のある人々——彼らは偏見のない観察者、そしてその点に関して判断をする能力を持っている人々——としばしば話をする機会があった。それらの人々の一致した意見では、そのもとで社会が苦しんでいる害悪は本質的に道徳的であり、たとえ労働の報酬を二倍にしても何も変わらないし、物質的状态の全般的そしてよりあきらかな環境のどんな変化もそれらに影響を与えないであろう、ということであった。」(*Minutes of the Committee of Council of Education* (以下MCCEと略), 1845, Vol. 1, pp.264-265, See, MCCE, 1846, Vol.2, p.178.)

「下層階級での肉体の適切な健康と十分な活力とを獲得するためには、どのようなステップを踏めばよいかと問われた際に、彼(ひとりの内科医)はこう答えた。『この質問に答えるに際して私の領域からとびだすことは望みませんが、もつとも下層の階級の衛生状態はたいへんおおく教育そして道徳状態に負っているにちがいないので、彼らに教育を強いるよう案出されたどんな手段も、私の意見では衛生状態の進歩での最大のステップでありましょう。』」(MCCE, 1844, Vol.2, p.271.)

かくして労働者階級の「病弊」は教育イデオログの診断内で決定的な意味を持つことになる。貧民をその貧困ゆえに責めることによって、教育家たちは自分たちの対応は、取り除くことのできる害悪に対する人間的そして本質的にキリスト教的対応である、と信じることができた。

ところで、イデオログたちは政治的あるいは社会的問題を道德問題として捉え、第一義的に教育の問題として論じていたが、その〈道德(morals)〉とはいったい何なのだろうか。〈道德〉ということばはつかみどころのない、とても漠然としたものであるが、イデオログたちがこのことばを発するのは、つねに労働者大衆に責めを負わす時であった。〈道德〉ということばはそういう指向性とでもいうべきものをもっていった。彼らが〈道德〉ということばを口にのぼらせるとき、彼らはそのことばを労働者大衆の生活習慣全般、その文化、あるいは文化的欠損の同義語として語っていた。もちろん非難を込めてである。そしてイデオログたちはこの〈道德〉という項目のもとに、労働者大衆の家族生活の崩壊、過激な政治的扇動、飲酒、ギャンブル、売春、祝祭、はたまたタバコに至るまでのありとあらゆるものを詰め込んだといっても過言ではない。その結果、独特のメタファーでちりばめられ、断罪された「野蛮な」生活習慣のおそろべきカタログが完成された。

一例をとりあげてみると、勅任視学官報告書あるいは議会の教育調査特別委員会報告書には非難を込めてタバコについて記している。「嗅ぎタバコやタバコがビア・ハウス自体と同様道德的進歩にとって大きな敵とならないかどうかはたいへん疑問である。というのも母親が嗅ぎタバコにふけり、父親がタバコにふけると、子どもに対する彼らの義務はまったくないがしろにされてしまう⁽²⁷⁾。」「嗜みタバコは一般的であったのですか？—はい、職人層でそうであったが、いまや同じような環境ではそれはほとんど知られていない⁽²⁸⁾。」

(27) *MCCE*, 1842, Vol.2, p.107.

(28) *Report 1835* 質問 792 に対するフランシス・プレースの証言。

留意すべきはこれが教育に関する報告書だということである。そこにわざわざタバコについて記されている事実である。この引用はあくまでも氷山の一角でしかないし、これに類したことは1830年代の議会の委員会あるいは視学官報告書にあきあきするほど見られる。なぜゆえ教育とほとんど直接関係のない事柄がめんめんと述べられているのだろうか。それは労働者大衆の暮らしぶりの隅々に至るまで観察し、それを媒介として〈教育〉とといった何を関わらせていくか、〈教育〉ということばに何を内包させていくか、〈教育〉ということばによってどのような意味を人々に押しつけるか、それをめぐる争いが展開していたからである。とくに1830、40年代はこのことの争いが沸騰した時代でもあった。

犯罪、貧困、道徳的・肉体的頹廢は、あたかもコレラが各地とりわけ諸都市で猛威をふるい、人々を次から次へと呑みつくし、その犠牲者の数を爆発的に増やす〈感染〉イメージとして、人々の脳裡に焼きつけられた。だから、この〈感染〉の危険性のなかに棲む労働者階級の子どもは、病気と頹廢の格好の標的であり、したがって社会にとって潜在的に危険なものとなされた。なぜ、あるいはどのようにしてこのようなイメージが生み出されたかは後に触れるとして、まずはこの危険性の根っこはいったいどこにあると捉えられていたのだろうか、という問いかけから入ってゆくことにしよう。

それに答えるためには、〈道徳〉ということばに当代のイデオログたちがいったい何を押し込めようとしていたのか、という問いに戻ってゆく。

I-3 「家庭崩壊」言説をめぐって

労働者大衆の文化——それをブルジョア・イデオログたちは〈道徳〉と呼ぶが——をめぐる独特のメタファーが数限りないほど生みおとされているが、そのメタファーの絡み合いのひとつの磁場は、独特なイメージそして「意味を押しつけられた」と言うにふさわしい〈家族〉へと収斂していつている。「家庭は労働者にとって避難場所 (shelter) という以外に何の関係も持っていない——そこにはまったく楽しみというものがない——彼にとって家庭はそ

ここにいつときでもいたくない肉体的疲労の光景にしかすぎない⁽²⁹⁾。」「この階級の人々は住むところは持っているが、家庭(homes)を持っていないことは悲しむべき真実である⁽³⁰⁾。」人々を暗澹とさせるこのような言説がそここで振りまかれていた。この労働者大衆の「家庭崩壊」言説が上に立つ者を震え上がらせ、彼らを衝き動かし、教育を含めたブルジョア的戦略とでもいうべきものの基盤を形成したことは言うまでもない。たとえば家父長的な「家」の再興、そのアナロジーでの家父長としての教師像はこの戦略の一翼を担うものである。

ところでこの言説はもちろん現実から析出されたことは確かである。だからこの言説の読み手たるわれわれは少なくとも二つの作業を経なくては批判的読みへと到達できないであろう。ひとつはそれが現実をどの程度に反映したか、ということである。この点の検証は実証的な研究にゆだねざるを得ない⁽³¹⁾。ふたつめは、こちらの方が私の主要な関心であるのだが、言説が逆に現実をどのように意味づけたか、ということである。現実のある一断面をきりとり、ことば化することによって、人々に対して現実を見るどのような視角を押しつけたか、といった方がよいかもかもしれない。

いうまでもなく、この独特の表象を押しつけられた労働者大衆の家族像、そして「家庭崩壊」言説の出所はブルジョア的家族イメージである。中産階級の人々が労働者大衆の家族現象に直面し、それを解釈し、ことばとして表現した際、その描かれた像は、家族はどうあるべきかという彼らが描く家庭像、ブルジョア的理想から導き出された規範的概念によって彩られていた。もう少し言うならば、労働者大衆の家族現象とでも言うべきものに対して、

(29) James Phillips Kay, *The Moral and Physical Condition.....*, p.25.

(30) *MCCE*, 1844, Vol.2, p.278.

(31) 19世紀ランカシャーの労働者階級の家族に対する都市・工業化が及ぼした影響を、国勢調査書を用いて分析したM.アンダーソンの著作(Michael Anderson, *Family structure in nineteenth century Lancashire*, Cambridge University Press, 1971)にここでは依拠することが多い。

家族的価値への脅威を感じ取った彼らの過剰ともいえる防衛的反応が、独特のイメージを持たせられた労働者大衆の家族像を生み出し、増殖させたのである。

「家族的価値」ということばはいささか練れていない感がしないでもないが、「家庭崩壊」言説をめぐるいくつかのイメージをとりあげることによって、そのことは明瞭になるであろう。

まずは「家庭崩壊」の最右翼の要因のひとつとして、産業革命による女性とりわけ母親の労働市場への流入をとりあげてみよう。工場内における女性・婦人労働に対するステレオタイプ化した構図は次のようなものである。

「母親も（父親同様）外へ働きに出る。というのも父親の稼ぎだけでは家族を養うのに充分ではないからである。……子どもたちは少女に預けられる。その少女の親たちはたぶんもっと貧しく、喜んで娘を稼ぎに出し、家計の助けとなるようにしている。こうして12歳になる前に外へ働きに行く多くの例を私は知っている。それらの子どもたちはその預かっている小さな子どもたち——まあなんとかわいそうな子どもたち！——の最初の悪をチェックすることができない。彼女らは街頭で身につけたもの以外何も教育を受けてはいない。そして彼女らが面倒見ている子どもたちにこのことが容易に教えられる。それは一般にぺてん、嘘、こそどろ、そしてまったく卑わいなことである⁽³²⁾。」

「少女たちは幼い年齢で工場に働きにはいるので、家庭経済(domestic economy) についてたくさんの知識を得ることができない。たとえこの知識を得るといふ偶然の機会に恵まれたにしても、女性は工場で雇用されるので、結婚後もこの原則を実際に応用することはない。幼い子どもはそのシステムの犠牲者である。すなわち、母親が骨折って働いている

(32) Samuel Wilderspin, *On the Importance of Educating the Infant Poor, from the age of eighteenth months,*, second ed., 1824, p.87.

間、雇われた人あるいは近所の人の世話に任せっぱなしにされる以前に、既に死んでしまっている。時には小さな少女が一人の子どもを、あるいは近所の家から集めた2、3人の子どもたちの面倒を見ている。このように子どもの養育に対して思いやりも関心も持っておらず、あるいは家事に時間をとられている人に預けられれば、子どもは食事も満足に与えられず、汚く、衣服も満足ではなく、寒さにさらされ放置され、その結果貧民の子どもたちの半分以上は5歳に達しないうちに死んでしまう⁽³³⁾。」

工場で雇用されている女性は一日中家庭から離れて外で働いているので、子どもたちを自分の手元において養育することができないし、当然のことながら、食事の準備その他の家事を十分にこなすことができない。あるいは他の人々——望ましくないその象徴は子守女——によって提供される「嘆かわしい」サービスに頼る状況で働いている、というのである。労働者階級の母親をめぐる論争的あるいは挑発的ともいえる一連の主張は、長時間工場労働の結果として、多くの働く女性は時間も余裕もなく、家庭と家族の世話もゆきとどかず、ひいては安らぎのない家庭に嫌気がさして父親や子どもたちは街の悪い仲間や飲み屋へと吸い寄せられていく、というものであった⁽³⁴⁾。かくして、子どもの養育が無視される要因、親に対する子どもたちの態度に影響を与える要素として、「働く母親」は決定的ともいえる重要性を持つこととなる。

なぜゆえ家族収入に対する「働く母親」の貢献が積極的に評価されずに、

(33) James Phillips Kay, *The Moral and Physical Condition.....*, pp.69-70.

(34) 「男性の余暇時間は主としてパブで過ごされている。事実は次のようなことである。女性はやりくりのこつやすべを欠いており、家庭管理あるいは家庭の安らぎについての考えをまったくもっておらず、居酒屋を家庭の炉辺よりもより安らぎのある場所に行っている。その結果、家族のすべての時間とお金は浪費され、誤って用いられている。」(MCCE, 1846, Vol.1, pp.201-202.)

逆に唾棄されるべき存在として貶められ、しりぞけられたのだろうか⁽³⁵⁾。というのは第一に、完全なるヴィクトリアン・レディーは働かないことを理想としていたからである。レディーは家庭内にいて、子どもたちをよくしつけ、夫にかしずき、全面的に依存することがその理想とされていたのである。したがって、「働く母親」のように自分自身の稼ぎをもつことは、「自然」と「男の保護本能」への侮辱に他ならなかったのである。

第二に、ヴィクトリア朝の人々は、女性は無垢で純潔であるべきとの根強い信仰を持っており、そのような信仰あるいは観念からすれば、工場での女性労働はふさわしいものではなかったからである。なぜならば工場労働は蔓延する「性的ふしだらさ」ゆえに純潔さを穢すものであった。このことに多くの言及をしているギaskell (Peter Gaskell) によれば、

「工場内に多数の若い男女が一緒に押し込められていることが道徳的過失の原因となっている。高温の環境という刺激（工場内での平均室温は華氏 70 度から 75 度で、以前はもっと高温であった）、男女の接触、動物的情欲への挑発例——すべてそれらのことがあいまって本能的性欲を早いうちから刺激して引き出すことになった。実際この点では製造業で雇用されている女性は、南国の気温で働いている女性にほぼ等しい。……

観察が教えるところによれば、個人が傷ついているばかりでなく性的交渉を享受しているという疑う余地のない証拠がある場合には、女性のこの時期（思春期）に伴う、そしてそれに先立つ一般的特徴が欠如している。そうであるばかりではなく、若干の場合には妊娠していることがある⁽³⁶⁾。」

(35) Neil McKendrick, 'Home Demand and Economic Growth: A New View of the Role of Women and Children in the Industrial Revolution', in Neil McKendrick (ed.), *Historical Perspective: Studies in English Thought and Society*, Europa Publications Limited, 1974 参照。

事実としての「性的放縦」をどのように位置づけるかはここではできないが、そのような言説がある事実の意味を押しつけ、それを増殖させたことをここでは確認しておけば充分であろう。だから矛盾していることに、工場で働く少女たちは「性的放縦」——その基準は私生児の多さによってはかられる——そして避妊——その基準は私生児の少なさによってはかられる——によって非難されることになる。同様のことは次のようにもまことしやかに語られる。綿工場地区で「庶出が広まっていなければ、淫乱以上の悪がそれを抑えている。最近明らかになったことは埋葬クラブからの埋葬金欲しさに母親が子どもに毒をしばしば飲ませていた⁽³⁷⁾。」婦人・女性が家事能力を失ったことについても、事実としてそうなったということと同時に、ヴィクトリア朝的<女性・婦人>概念の視座からの批判であるという点に留意すべきである。

このような言説に囲まれて、「無性の母」はよりその神聖さを増すことになる。

「女性に対して、そのさまざまな関係の中でも、とりわけ次の世代を担う若い人々の幼い時の監視・監護が託されている。すなわち、精神的性質の最初の芽生えを呼び起こし、育てるのは女性である。女性は幼い心に愛情を注ぎ込むべきである。その愛情は幼い心の内部で、神聖な、情の深いそして純粋な源として常になるべきものである。他方では、少年のエネルギーと衝動が自己統制の限界を超えてまで自らを猛烈に示した場合には、……女性は少年を抑え、彼女の弱さを使ってでも彼を強くしなければならぬ。成人してからも重要な義務はその性に与えられるべ

(36) Peter Gaskell, *The Manufacturing Population of England*, ch.2, quoted in E. Royston Pike (ed.), *Human Documents of the Industrial Revolution in Britain*, George Allen and Unwin, 1966, pp.280-281.

(37) Jelinger Symons, *op cit.*, p.39.

きである。自然の創造者はその性に対してそれほど力強くはないが、精神的・肉体的力をあたえ、肉体と精神のたいへんな感受性、感情の繊細さと洗練さをあたえた。女性に対して家庭の神聖さが託されている。すなわち、そうでもしなかったならばその毎日の営みがみずからの性質・自然を駄目にしてしまい、自分たちの魂を世俗の動揺に鎖でつなぎ止めてしまう人々の中に、女性は柔らかなそして純粋な感情を喚起し、育てるべきである。救世主はまず最初女性に対して不滅の形で自らを示し、女性に近づきつつある彼の賛美の最初のメッセージを託したように、母親の膝であれ——あるいは家族サークルでの神聖な会話の中であれ——悲惨なそして悪徳のすまいのなかであれ——死にゆく床であれ、幼い子どもに対して伝えられる福音の神聖なメッセージは、女性にゆだねられている⁽³⁸⁾。」

家族的価値への脅威と映ったものはなにも母親の工場労働だけではない。子どもの労働のありようもそのひとつである。当時の人々の公約数的解釈によれば、親はその子どもたちを養育し、学校へ送り、教育を受けさせる義務を放棄し、若い年齢で労働市場に投げ入れ、その労働力を搾取している。それだけではなく、この関係はある時点で逆転し、親はその子どもから手痛い「しっぺ返し」を受けることになる、というのだ。

「しばしば父親は、健康になんら問題もなく、雇用の機会もきわめてたくさんあるにもかかわらず、ぶらぶら怠けており、その働かされている子どもたちの賃金によって生活している。他方では、老年や衰弱で親のエネルギーが損なわれた場合には、成人した子どもたちは親たちを教区の救貧から得られるわずかな生活費に委ねてしまう⁽³⁹⁾。」

(38) Mary Carpenter, *op cit.*, pp.81-82.

(39) James Phillips Kay, *The Moral and Physical Condition.....*, p.64.

「子どもの労働は親の労働を超え勝ちである。ここに想像で描き出すことのたいへんやさしい社会生活の状態——それを家族とは私は呼ばない——が出現する。すなわち、ものごとのすべての秩序をひっくりかえす状態である。金の力が支配する、あるいは少なくともかなりな影響力をもつことは、世の中でそうであるのと同様家族でも真実である。かつて幸せにも『一家の稼ぎ手 (the bread-winners)』と呼ばれてきたように、子どもたちが『一家の稼ぎ手』である家族ではそうになっている。子どもが望むことを、家族はしなければならないし、またそうしている。このような小さな絶対君主が3人あるいは4人いる家族では、彼らは自分自身の価値を知っており、その価値にもとづいて行動する。それに続く混乱は悲惨なもので、頹廢的である。……

親は命令するが、実際は子どもは親に従わない。そしてさらに従わないことを誇る。子どもの親は毎日のパンを子どもに食べさせてもらっているし、子どもは親に苦いパンを食わせてやっていることを知っている。この驚くべき邪悪さがどの程度広がるかを言うことは不可能である⁽⁴⁰⁾。」

この家族現象をおどろおどろしく描写させるように衝き動かしているものは何なのだろうか。それは本来情愛という絆によって結びつけられるべき親子関係が、きわめてドライな経済的手段的關係として捉えられていることへの恐怖である。

中産階級を震撼させるのに力あったであろうこれらの言説からも、親と子どもとの軋轢に決定的ともいえる影響を及ぼした要因は、子どもが稼ぎ出す賃金であったことがみてとれる。実際、子どもの賃金は低賃金であるとはいえ、しばしば親の賃金を上回ることもあったのであり⁽⁴¹⁾、親と子どもとの逆

(40) *MCCE*, 1844, Vol.2, p.283.

転した扶養関係、というよりも正確に言えばそのような現象をひき起こす潜在可能性に都市の労働者家族は晒されていたのである。中産階級の人々がその理念からして受け入れることのできなかつたものは、この家父長的親子関係のほころびであった。

アンダーソンが指摘しているように、19世紀の都市・工業生活が家族の紐帯に影響を及ぼしたのは、10代の子どもたちに対して家族へ全面的に依存しなくともすむレベルの賃金を提供することを通してであった。家族構成員に対する規範的統制は構造的に言っても次第に弱体化し、住居や食糧その他の日常必需品は市場で手に入れることができたので、多くの者は短期的・手段的要素のみを考える限り、そして雇用される限り、親あるいは親類と住むと同様あるいはそれ以上にひとりで快適に暮らすことができたのである。確かに産業革命の渦の中、子どもたちに親との関係をきわめてドライに考えさせ、その関係を終わらせるように勢いづけた要因には事欠くことはなかった。産業革命のなかで揺れ動く労働者大衆の家族構造のもとでは、子どもに対する親の地位はけっして安定したものではなかった。親はかつてのように子どもに対して家産——とくに土地——を媒介とする統制力を行使することもできず、また工場制の進展につれて技能のもつ重みが薄れ、職業技能の世代的伝達者としての父親の役割も影の薄いものとなっていった。このことに加えて、先ほどの引用にもあった通り、子どもの稼ぎ出す賃金は『一家の稼ぎ手』としての父親の伝統的地位・権威を揺さぶり、浸食するものとなっていった。こうして家父長的支配は揺らぎ、衰退を余儀なくされたのである。だから実際にその関係が最終的に崩れた場合には、引用したような親子の逆転したきわめてドライな関係が生じたのである。

そして実際そうしなくとも、多くの子どもたちはこのことの潜在可能性そ

(41) 1830年代はじめにランカシャーの綿工場に雇用されていた年少男子の平均賃金は、16歳で週7シリングそれ以降上昇して20歳で13シリングであった。
(Michael Anderson, *op. cit.*, p.124.)

して家族に代わって機能を提供するものがあることに気づいており、家族との独立性のある関係を結ぶ方法としてそれを用いたのである⁽⁴²⁾。

実際に都市は子どもが「独立」することを可能にさせる条件を具備していた。その象徴のひとつが「放浪者、売春婦、盗人の住処、乱交の温床そして反家庭的、反社会的価値の要塞」と当時の人々が怖れをもってみなした下宿屋であろう。

「一つの下宿屋に40人から50人の常習の売春婦そして盗人が男女構わず雑魚寝している。その多くの者はさまざまな町からやってきている。彼らは自分たちが知っていることを互いに話す。家出をしこの家にやってくるようにと若者たちを誘惑する悪い娘っ子は、より多くの者を盗人にさせる。」

「下宿屋はたいへん危険な悪である。男女10人が床に雑魚寝をしているような多くの下宿屋を知っている。親から逃げだした若者はそこを自分の家にし、そこで有名な学者（盗人）に拾われ、一度そこにはいると二度と矯正の機会はなくなる。さまざまな土地からの人々と出会い、旅をする気持ちがあるならば、彼らと一緒に好きなところへと行くことができる。そのほかにも、下宿屋の人々は工場から若い少女をかどわかしてそこで寝泊まりさせるようにする。それは彼らの家を作る確実な方法である⁽⁴³⁾。」

あるいは普通の家庭でも下宿人をおいている家庭は少なくなく、「さまざまな年齢と性別の十人が小さな部屋で3つのベッドを共有しているのを見るこ

(42) 下宿で自活するには生活費は週6シリングから6シリング6ペンスであった。したがって、工場で雇用されている年少男子は10代後半で自活することは可能であった。(Ibid., p.128.)

(43) 警察委員会報告書 *Report of the Constabulary Force Commissioners* の中のひとりの重罪犯人の証言 Jelinger Symons, *op cit.*, pp.17-18.

ともめずらしくはない。もっと悪い例もだすことができる⁽⁴⁴⁾」との報告も多くみられる。

繰り返しになるが、これらの証言＝言説と現実との関係についても、いままでとりあげた言説について指摘したこととほぼ同様のことが言える。若者が高賃金ゆえに家を出て、下宿した結果、若者は反家族的価値に染まり、またそこからさまざまな諸問題が派生する。こういうことが潜在可能性としてあったことは事実である。だがこのような現象がけっして一般化していたわけではない⁽⁴⁵⁾。ここでの争いは、ある現象が現実には生じたか否か、あるいはどの程度の頻度で生じたかをめぐってのそれというよりも、その言説が人々に何を、またどのような視角から見させようと強いたかが問題なのである。すなわち、多くの者が実際に我が家を出て下宿したからというよりも、その潜在可能性がはらむ攪乱的影響を度外れに拡大し、脅威を煽ること、そのことがこの言説の主眼であったと言っても過言ではない。もしこれらの証言が「家庭の崩壊」「性的放縦」という恐怖の言説へと人々を駆り立て、人々がその言説のプリズムを通して眼の前で生起している現象に意味づけをしたとすれば、ある意味で成功だったのである。

ところで、このような家族構造のもとで生きる労働者階級の子どもたちのライフ・サイクルは、当然のことながら中産階級の子どもたちのそれとはかなり様相を異にしている。だから中産階級的〈子ども〉範ちゅうからの逸脱現象へと中産階級の人々のまなざしは吸い寄せられていく。

「鉄工業や工場地区では、子どもたちは彼ら自身のマスターであり、12

(44) *MCCE*, 1839-40, p.176.

(45) 現在のような福祉制度が完備されていない時代においては、子どもの誕生、妻が働きに出た際の子育て、失業、病気、死などは家族を一挙に危機に陥れ、解体させる衝撃力を持っていた。このような生活危機の衝撃を最小限に食い止め、経済的そして心理的不安を解消するためには、この時代には家族を中心とする親戚関係に頼らざるを得なかった。(Michael Anderson, *op.cit.*, pp.160-161.)

歳で独立した生計を営んでいる⁽⁴⁶⁾。」

「筋力、運動器官は早熟であり、子どもは自分の周りの世界で活動的・自立的役割を占めることの必要性ばかりでなく、それができる能力が自分自身の内部にあることを発見する。すなわち、意志は権威や理性によって抑制されたり、導かれたりすることがないので、不自然な力を獲得する。これらすべてのことは『精神統治能力』をはるかに陵駕している。というのは、知力は動物的欲望の満足に役立つという点でのみ訓練され、精神の性質はほとんど眠りこけている。まったくの無力感、周りの人の優れた力そして知恵への信頼、自分の幸せへの愛すべき希望から生じる、子ども時代を特徴づける信念・信頼は、これらの子どもたちにはまったく存在しない⁽⁴⁷⁾。」

とすれば、<真の子ども時代>をこそ彼らに取り戻してやらなければならない。「子どもは彼自身では満足させることのできない新しいそして健康的な欲望を彼の中に再び生み出すことによって、そして彼自身のよりもはるかに巨大な力があり、欲望を満足させるにはその力に頼らなければならないことを理解することによって、依存の感覚へと連れ戻されなければならない⁽⁴⁸⁾」からである。後でも述べるが、13歳ぐらいの子どもたちが親から離れ、下宿をし、大人にたち混じって、喫煙、飲酒、ギャンブルに浸ることは、ヴィクトリア朝の<子ども>概念——イデオロギーとしての<子ども>あるいは<子ども>言説と言い換えてもよい——からみれば、とうてい許容できるものではなかった。なぜならば親への「依存」こそが中産階級の子どもの属性であったからである。労働者階級の子どもは親へ全面的に依存しないがゆえに異様なものと映じたに違いない。しかし、そのような<子ども>言説を生

(46) Jelinger Symons, *op cit.*, p.33.

(47) Mary Carpenter, *op. cit.*, pp.296-297.

(48) *Ibid.*, p.298.

み出す基盤となる力は、社会構造的にも文化的にも労働者階級に不可避的な力として押し寄せてきてはいなかった。親からの独立を10代後半でなしえたとしても、親が統制することができなくなったというよりも、それは階級の規範として、あたりまえの「自立」であり、そのように考えるべきではなかったろうか。

また「依存」をその属性とする〈子ども〉時代は、表面上は「性」のない時期である⁽⁴⁹⁾。ヴィクトリアン・モラリズムで覆われた〈子ども〉は性的欲望は持たないものとされた。中産階級は子どもに多大な金と時間を注ぎ込み、特に娘たちは将来貞淑な妻・母親となるために、社会から隔離され、家庭に閉じ込められ、ひたすら性的無垢を護ることが強いられた。だから〈子ども〉言説に染まった人々が、労働者階級の少女と実際に向かい合った際の当惑を想像することはさほど困難ではない。

「小さな少年たちがその相手の少女たち(それぞれの少年たちは自分の気に入っている少女を『俺の女』と言っている)を選んでいるのを目撃した。そしてすべての略奪品は彼女らと一緒に共有される。私自身も小さな少女に付きまとい、声をかけられたことがある。彼女は何が欲しいのかという私の質問に答えて、『酒が飲みたい』と答えた。イングランドとスコットランドの両方の大きな町の多くで(とくにロンドン、リヴァプール、バース、マンチェスター、そしてグラスゴー)、あきらかに身分ある人がしばしば8歳ぐらいの少女たち、ある者は着飾って、ある者はぼろを着ており、売春!によって自分と親の生計を立てている少女に付きまとい、ということを躊躇なく主張することができる。そのよう

(49) 「いたいけな」少女売春の顧客は中産階級の男であった。(Deborah Gorham, 'The "Maiden Tribute of Modern Babylon" Re-Examined: Child Prostitution and the Idea of Childhood in Late-Victorian England', *Victorian Studies*, Vol. 21, No.3, 1978.)

なまだほんの子どもたちだけが暮らしている多くの家屋がある。そしてバックストン氏が言うには、彼とサミュエル・ホア氏は男女の子どもたちのみが入ることを許される多くの建物がどこにあるかを明らかにすることができるということである。そこでは彼自身の言葉を使うと『入室は許可されないだろうが、許可されたならば、目に余る、明らかな、そしてショッキングな放蕩のシーンを目にするであろう。』実際依然としてはびこっている罪悪は膨大なものである。そして神の寛容なくしては、イングランドはやがて古き世界あるいはソドムの世界の運命と同じ路をたどることになってしまうであろう⁽⁵⁰⁾。」

ウィルダースピンの証言によれば、大都市に住む子どもたちの性的放縦は、寝室や住むべき適切な部屋がないことから生じている。一つの部屋で9人あるいは11人の家族が生活している家族もある。さまざまな年齢、性別のちがう子どもが親と一緒に寝ていることもある。あるいは父親がときどき酔って帰ってきて、子どもが口には出せないような光景を見ているということもある。「その結果は繊細さ、上品さの感覚が幼いときから男女で失われる。彼らが世の中に出て、工場に働きにやられると、そこでもっと悪くなる。これらすべての結果は、子どもたちは9歳にならないうちに互いに性的な観点から関係を持つようとする。これこそその種の非行が急激に増大している主要因の一つである⁽⁵¹⁾。」

19世紀前半の報告書、教育著作を読み慣れると、われわれ読者はこの類のことば＝言説に出会う。きわめて頻繁に、これでもかこれでもかといいかげん食傷気味になるほどに、それは積み重ねられてゆく。もしその言説を受容

(50) Samuel Wilderspin, *Early Discipline Illustrated; or, the Infant System Progressing and Successful*, 1832, p.50.

(51) *Report 1835*, Q381.

し、それにのっていけば、われわれはその書き手と同じ眼と感覚を獲得したことになる。眼と感覚を獲得したということは、現象を一定の視角から視ることを当然のことながらわれわれに強いる。イデオロギーあるいは言説はこの点できわめて能動的である。だからこのイデオロギーとしての、言説としての罫にかからないためには、ひとつにはその現象説明を実証的に行なうという作業が要請される。そしてひとつには言説内部での問題、たとえばなぜゆえ倫理的・道徳的判断を下すのか、その判断を下す前提、指向性を明らかにしなければならない。そのためにはもう少し<道徳>とは何をさしているのか、追うことにしよう。